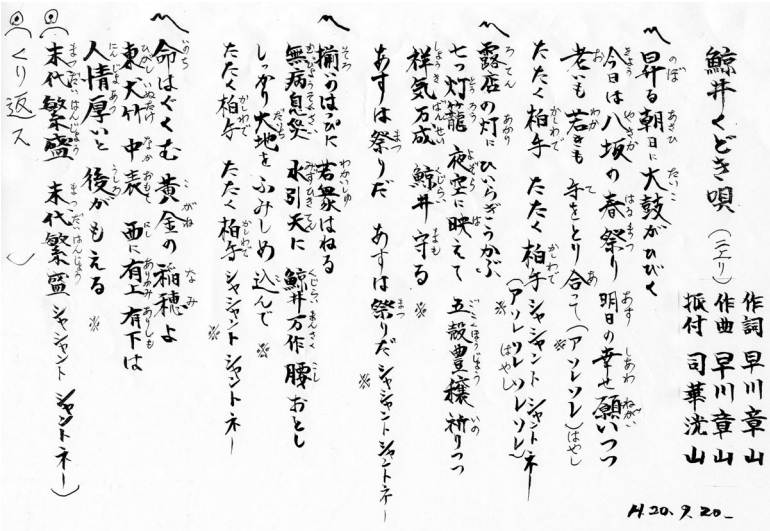
表通り裏通り

後世に伝えたい伝統

昔ながらの田園風景が多く残る鯨井地区。ここには、長い間、地域の皆さんに愛され続けている祭りや文化財があります。元鯨井自治会長の早川覚広さん（68歳）は、これらの特色を入れた歌詞を作成。民謡調の曲も付けて「鯨井くどき唄」が完成しました。地域への愛着が歌詞に込められた、郷土色豊かな歌が、6月28日に、市民会館で披露されました。

拍子をとる早川さん



鯨井くどき唄（三ツ）

作詞 早川章山
作曲 早川章山
振付 司華洸山

昇る朝日に大鼓かひびく
今日は八坂の春祭り 明日の幸せ願いつつ
老も若きも手をとり合って（アソレソレ）
たたく柏子 たたく柏子 シャシャントシャントネー
露店の灯に ひらぎうかぶ
七つ灯籠 夜空に映えて 五穀豊穣 祈りつつ
祥気万成 鯨井守る
あすは祭りだ あすは祭りだ シャシャントシャントネー
（アソレソレ）
（くり返し）
欄干のはしに 若衆はねる
無病息災 水引天に 鯨井万作 腰おとし
しっかり大地をふみしめ 込んで
たたく柏子 たたく柏子 シャシャントシャントネー
命はぐくむ 黄金の稲穂よ
東大竹 中表 西に有工 有下は
人情厚いと 後がもえる
末代繁盛 末代繁盛 シャシャントシャントネー
（末代繁盛 末代繁盛 シャシャントシャントネー）

H20.7.20

早川さん自筆の鯨井くどき唄の歌詞、右下は完成した日付です

六十八年間、鯨井で生活している早川さん。地域の伝統など、守り続けたい大切なものをどうしたら後世に残すことができるか、と考えたのが平成19年のことでした。

それから半年以上かけて、「鯨井くどき唄」の制作が始まりました。「くどき」とは言い伝えること。この歌が祭りなどで流れ、地域の伝統を言い伝えるものになってほしいという願いが込められています。

歌詞には、鯨井地区に関連するさまざまな事柄が入っています。一番は、八坂神社の春祭り。二番は、夏祭りの前夜の情景。市の保存樹木のヒイラギや七つ灯ろうが登場します。三番は、市指定の文化財である鯨井の万作が題材。若者たちが豊作を祝い、踊る様子が描かれます。四番は、忘れられつつある古い地名をつづり、農業や地域の繁栄を祈っています。

鯨井自治会館での練習

早川さんの思いに共感し、地域の皆さんや鯨井地区出身者など三十人ほどが、練習に参加。六十歳代と七十歳代を中心に、年齢層にも幅があります。尺八、三味線、太鼓などの伴奏を七、八人が担当し、他の皆さんは歌を担当しています。

地域の皆さんに親しんでもらうため、この歌に踊りを取り入れることになりました。振り付けを担当する中野洸司さん（70歳）は、「鯨井の万作の手踊りを、振り付けに取り入れました。歌とともに多くの人に親しんでもらえるとうれしいですね」と話してくれました。今後は、盆踊り・敬老会・文化祭などでの発表を計画しています。

「この歌がきっかけとなって、子供から大人まで地域の皆さんの交流が深まり、自分の住む地域を知る助けになればいいですね」と早川さん。この歌が、鯨井地区の新たな伝統となることでしょう。

まちのできごと
川越市の面積は109.16㎢

109パレット

全国のおかみさん大集合

全国からのおかみさんで会場はいっぱいに

６月４日、「第17回全国商店街おかみさん交流サミットin川越」が開催されました。地域の活性化に役立てようと、全国から約500人のおかみさんが参加。講演会や街並み見学などで交流を深めました。パンフレットの作成や参加者の出迎えなど、中心となって催しを運営したのは、川越商店街連合会の川越やまぶきおかみさん会。「今回のテーマはきずな。きずなが広がることで、地域だけではなく、商店街も活性化します」と会長の栗原裕子さん（仙波町２丁目）。これまでは、自分たちの技量を高める目的で、パソコン講座や外国語講習などを行ってきました。これからは、全国のおかみさんたちの取り組みをヒントに、まちを活性化するためのアイデアを練っていくそうです。

川越やまぶきおかみさん会の皆さん。前列中央が栗原会長

たくさんの花がお出迎え

市役所の玄関前では、赤や白、ピンクの花が咲いた約300株のニチニチソウがお出迎え。訪れる人々の目を楽しませてくれます。これは、花いっぱい活動として、川越中央ロータリークラブが、春と秋の２回実施しているもの。花植え作業を市民へ呼びかけ、今年は、小学生を含む６人が参加。「今後も地域に密着した活動を続けたいですね」と会長の藤崎榮一さん（菅間）。

夏の間、次々に花を咲かせます

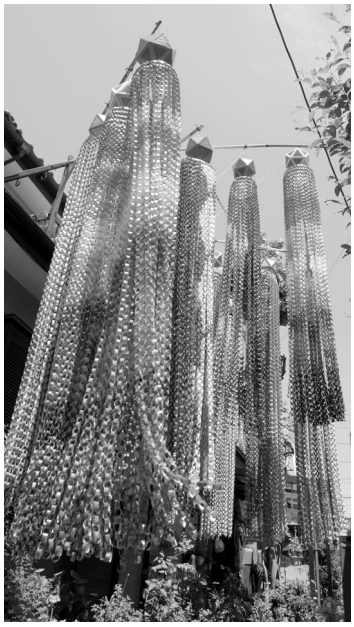
スポーツが私にくれたもの

やまぶき会館で開催された「第28回女性スポーツの集い」。水泳で２度の五輪出場を果たした長崎宏子さんが講演しました。「水に顔をつけるのが嫌いなのに水泳を始めました。レベルが上がってくると、プレッシャーや結果に悩む時もありました。負けてつらかったとき、支えてくれたのは母親でした。スポーツが教えてくれた親の愛情。これからは、親として子供が本当に苦しいときに、近くにいてあげたい」と語る姿が、会場の皆さんの共感を誘っていました。

語りかけるように、笑顔で話す長崎さん

七夕飾りに込める思い

海鉾五郎さん（72歳・砂新田）の自宅は、この時期、10数本の七夕飾りで彩られます。長さ３メートル以上の飾りは、虹のような色合いや、ひし形を組み合わせた模様など、すべてが手作りです。デザイン、材料集め、製作まですべて一人でこなします。１本の飾りで使う紙の輪は、約2,700個にもなるそうです。材料はチラシなどですが、同じ色合いの紙を集めるのが大変だとか。仕上げるのに、１か月程度はかかるそうです。作り続けて30数年。「近所の方や小学生に喜んでもらえるのが、とてもうれしいですね」と話してくれました。


風にたなびく手作りの飾り